



Report II

特集・動き始めた伊豆観光振興
「伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み」

観光地・伊豆の 新しい魅力を つくる。

平成23年12月10日、伊豆急行は開業50周年の記念すべき日を迎えた。当日は伊豆高原駅と伊豆急下田駅で記念イベントを開催、県内外からの鉄道ファンや観光客、沿線住民が訪れ、伊豆半島東海岸の大動脈を迎えた節目を賑やかに祝った。国内観光需要の停滞が続く中、伊豆急行はさまざまな誘客施策を果敢に打ち出している。そして、この50周年を一つの区切りに、地域とともに新たな観光需要の掘り起こしに取り組み方針だ。次なる50年へのあゆみへ——伊豆急行の取り組みを紹介する。

文●茶木 環／撮影●織本知之
写真提供●割谷英雄／資料提供●伊豆急行株式会社

特集：動き始めた伊豆観光振興

[伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み]



1 祝賀電車のヘッドマークを掲出した「復活100系」 2 「伊豆急でんしゃまつり」では鉄道グッズも販売。買い物客で賑わった 3 「リゾートドルフィン号」にはたくさんの人が列をなして見学 4 子どもたちに大人気のATカート体験乗車 5 6 電気設備作業に使用する珍しいモーターカーの体験乗車も実施

「伊豆急でんしゃまつり」は10年前にスタートし、いまでは年に2回開催される伊豆急行の人気イベントだが、毎回社員から出されるさまざまな企画で実施されているという。「鉄道会社のイベント」として特別列車の運行や記念切符の販売などになりがちだが、お客さまと社員が一緒に楽しめる、そんなイベントをつくってみたいと持ち上がった。普段は公開しない部分もオープンにして、お客さまにファンになっていただく。裏方的な存在である保線や電気担当者にとっても、じかにお客さまと接することができる貴重な機会になっている」と、土

意志を示した50周年記念事業
雲ひとつない冬晴れの青い空が広がった伊豆急行の開業記念日、伊豆高原駅と伊豆急下田駅の二つの会場では、50周年を祝うさまざまな記念イベントが開催された。
伊豆高原駅の車両工場を開放して開催された「伊豆急でんしゃまつり」では、線路の点検作業に使用するATカートや電気設備作業に使用するモーターカーの体験乗車、洗車機体験などに、大勢の家族連れが参加。同会場では、その2カ月前にデビューしたばかりの「リゾートドルフィン号」も公開され、来場者は記念撮影などを楽しんだ。



伊豆急行株式会社 取締役鉄道部長 技師長

土屋隆司
Takashi TSUCHIYA



伊豆急行株式会社 鉄道部 次長 兼 事業推進課長

比企恒裕
Tsunehiro HIKI

屋隆司取締役鉄道部長は語る。
分かりやすい名称にも、単に車両工場を公開するのではなく、いろいろな電車と遊ぼう」という目的が込められている。スタート時から実施されている運転士や車掌の子どもサイズの制服を用意して記念写真を撮ってもらうのも、若手社員のアイデアによるものだ。
駅に隣接するくぬぎの森では、約50店の露店が並ぶ「伊豆高原もりもり市」も開かれ、伊豆の地場産品やクラフト作品を買い求める観光客で賑わった。
また、駅構内のやまもプラザホールには、この日から下田太鼓祭りで使用される「太鼓台」が展示された。この太鼓台



1 伊豆急下田駅で開催された歓迎セレモニーで披露された下田太鼓 2 3 到着した「特急踊り子107号」と50周年記念のヘッドマーク 4 降り立った観光客を出迎える旅館組合関係者 5 開業50周年を記念して一新された制服の発表会 6 「復活100系」の前で開催された開業時(右)・現行(左)・新制服(中央)の撮影会



は約150年前につくられたもので、下田に古くから伝承する文化を伝えたいと伊豆急行が借り受け、修復したもの。当日は太鼓演奏も披露され、多くの人が興味深そうに見入っていた。

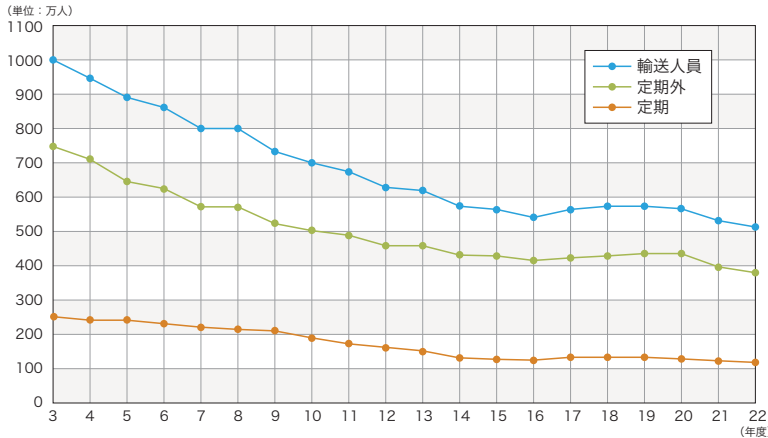
「伊豆の歴史は古く、地域ごとにそれぞれの文化が継承されている。互いの地域について知らないことも多い。観光のお客さまにご覧いただきたいのはもちろんだが、伊豆急行線のそれぞれの地域の交流を深めていくことが必要と考え、下田の祭りの太鼓台を敢えて伊豆高原駅に展示した」と土屋鉄道部長は説明する。

一方、伊豆急下田駅では、開業50周年を記念して一新された制服の発表会、開業日の一番列車に取り付けた祝賀電車のヘッドマークを掲出した「復活100系」と「黒船電車」「踊り子号」「スーパードビュー踊り子号」を並べた電車撮影会が行われた。

さらに、特急踊り子107号到着時には、下田市・南伊豆町・西伊豆町の各観光協会と旅館組合の出席を得て、東京・伊豆急下田間直通運転50周年を記念した歓迎セレモニーを開催。下田太鼓の演奏とともに、降り立った乗客を出迎え、伊豆観光をアピールした。

昭和36年の伊豆急行線開業から50年、大勢の鉄道ファンや観光客、沿線住民とともに、記念すべき節目を祝った伊豆急行。二つの会場で開催されたさまざまな記念イベントには、地域にしっかりと根を張り、伊豆の文化継承と観光振興に貢献していきたいという強い意志が見て取れる。次の半世紀への一歩をしるした伊

輸送人員の推移



豆急行の目標は、不振が続く伊豆観光の活性化だ。

首都圏からの誘客施策を積極展開

伊豆急行の平成22年度の輸送人員は511万人。この数字は開業4年目、昭和39年の518万人を下回る。

全体の75%が定期外利用者で、その大半を首都圏からの観光客が占める。社会情勢や景況に収益が大きく左右されるだけに、誘客施策には常に力を注いできた。「二社では難しくても、連携することで可能となる施策は多い。地元自治体、観光施設や宿泊施設、JR東日本や旅行会

特集：動き始めた伊豆観光振興

[伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み]



伊東行きルートの区間賞ファスナートップと、下田行きルートの電車バッジ。両ルートの完全踏破で2つのコレクションボックスが揃うと圧巻

社、マスコミなどと連携して、お客さまにご利用いただけそうなこと、伊豆に関心を持っていただけそうなことには、積極的に取り組んでいる」(土屋鉄道部長)

そうした中で現在、力を入れているものの一つがウォーキングだ。平成12年に静岡県と共同で、歩いて歩くでもぐもぐ食べる、ウォーキングとグルメの実験事業に取り組んだが、同時期にJR東日本も「駅からハイキング」を始めたことから、共同のウォーキングイベントに取り組むようになった。

伊豆半島内にコースを設定して実施されるこのイベントは、現在は「伊豆半島花&てもぐウォーク」として地元8市町と伊豆急行、伊豆箱根鉄道、東海自動車との共同企画で実施している。JR東日本、JR東海との共同ウォーキングも、それぞれ年に4、5回の頻度で開催している。

伊豆急行の自社企画としては、今年で8回目となる「伊豆急全線ウォーク」がある。期間中(平成23年9月1日〜24年5月31日)に、伊豆急行線全駅を経由し

て伊東行き、下田行きの両ルート(約161km)を完歩するウォーキングイベントだ。1駅歩くごとに区間賞としてオリジナルの電車バッジやファスナートップがもらえ、ルートを完歩すると全駅分を収納するコレクションボックスがプレゼントされる。

参加方法は、1駅ごとに入場券を購入し、次の駅でスタンプを押してもらおうシステム。参加者は日時が決められていないので、自由に歩くことができる。伊豆急行としても天候の心配やイベントスタンプを置く必要がない。その参加しやすさから1回の延べ参加人数が最高で約4万人を超えるほどの人気ぶりだ。

一方、特急電車を伊豆急行線に乗り入れているJR東日本や親会社の東急電鉄とは、開業時から連携してさまざまな誘客施策を展開している。近年では地元自治体とも共同し、その活動はさらに精力的なものとなっている。

例えばJR東日本・東急の目黒駅や武蔵小杉駅などでは、下田市・東伊豆町・河津町・南伊豆町の1市3町と共同で伊

豆観光プロモーションを展開。伊豆半島8市町(熱海市・伊東市・下田市・東伊豆町・河津町・南伊豆町・松崎町・西伊豆町)との共同プロモーションも活発で、JR東日本の横須賀駅や横浜駅、品川駅などで観光誘致イベントを実施している。小田原駅開業90周年記念イベントでは、伊豆半島8市町、東海自動車と共同で「アルファ・リゾート21」を展示、伊豆観光のPRを行った。

こうしたプロモーションで活躍しているのが、下田開港150周年を記念してリニューアルデビューしたリゾート21「黒船電車」だ。

「『黒船』は、子どもから大人まで誰でも知っている、下田の象徴ともいえるもの。JR東日本の駅に黒船電車が停車していると、見学したり記念撮影をしたり、皆さんが注目してくださる。こんなにいいブランドが自分たちのそばにあったことに改めて気付かされた」と鉄道部の比企恒裕次長兼事業推進課長は話す。

伊豆への観光誘致は、首都圏だけでなくどまらず、中京や近畿、さらには中国や韓国、台湾なども視野に、積極的に取り組んでいく方針だ。



城ヶ崎海岸駅に停車する「黒船電車」

きめ細やかに地元の利用を促進

観光客利用が多いとはいえ、伊豆急行には地元住民の足としての使命もある。しかし、この地域は、少子高齢化がより進んでいるのが特徴だ。沿線2市3町(伊東市・下田市・東伊豆町・河津町・南伊豆町)の合計人口は、12万6628人(平成22年)。この10年で5.7%減少している。65歳以上の人口比率は33.7%(静岡県全体は24.1%)と1割近く増加しており、この傾向はさらに続くだろうと予想されている。また、少子化の影響で、

沿線の高校の生徒数も、この10年で30・2%減少しており、定期利用の収益減も免れないのが現状だ。

そこで伊豆急行では、さまざまな地元向け企画切符を新設。沿線住民の利用促進に取り組んでいる。

「伊豆急シニアバスポート」は、沿線2市3町に暮らす高齢者を対象としたもので、切符購入時にバスポートを提示すると運賃が半額になる。平成16年に開始した割引サービスだが、今年1月、対象年齢を70歳以上から65歳以上に拡大した。対象年齢を拡大して約1カ月で670人の登録申し込みがあり、バスポート会員数は7400人を超えている。

「地域内では高齢者の外出促進が課題の一つともなっている。病院への通院や買い物だけではなく、沿線内での観光などにも活用していただきたい」と、経営企画部の塚本昌哉次長兼企画担当課長は語る。

今年3月には、60歳以上の通勤定期が半額となる「60（ロクマル）定期」の発売を開始し、企業の雇用延長に対応している。「半額定期が少しでも沿線の雇用促進につながるれば」（塚本次長）という思いもあるという。

児童生徒向けには「伊豆急小学生バスポート」「中学生きっぷ」を用意している。小学生バスポートは、1乗車100円で伊豆急行線内（最大運賃790円）を利用できるもので、現在は約2000人が登録、22年度は延べ1万人が利用している。中学生きっぷは生徒手帳の提示で運賃が半額になり、22年度は延べ3万7000人が利用した。伊豆急行で

は、学校の部活動や遠足などの校外学習、塾通いに使ってもらいたいと、学校や学習塾、図書館などに利用を呼び掛けている。

一方、高校生の通学定期は、3カ月や6カ月の販売単位だと余分が出てしまうという声を受けて、平成17年に新設した「学期定期」が好評だ。運賃が高いとの理由で親がマイカーで送迎しているケースも少なくないことから、通常の通学定期よりさらに15%割引引いて販売。毎学期700人ほどが利用している。

さらに今年1月からは「自由席特急回数券」の割引率も拡大している。伊豆急伊豆急下田間1乗車400円の特急券10枚つづりを1000円で販売。発売から1カ月で70冊を売り上げた。

「特急列車が入ると、普通電車の待ち時間がどうしても長くなる。1乗車100円なら、普通電車と同じように特急をご利用いただけるのではないかと期待している」（塚本次長）

観光客向けの企画切符も、さまざまなものが登場している。特に、夏休みと同様に観光客が多い河津桜まつりの期間中に販売する「河津桜パーク&トレイン往復きっぷ」が好評だ。桜まつり会場手前の伊豆高原駅に車を駐車して河津駅まで電車を利用する企画切符で、駐車場は無料、伊豆高原―河津駅間の往復切符も20%割引になっている。ほかの観光スポットも回りたい観光客向けには伊豆高原―伊豆急下田駅間乗り降り自由の「河津桜パーク&トレインフリーきっぷ」を用意した。

「桜まつりの時期は国道が渋滞して、到着時間が読めないことが多い。車での来訪者にも電車を利用することで、時間を気にせず河津桜を楽しんでいただきたい」と、経営企画部企画担当の関谷稔課長補佐は語る。

そうした中、今年新たに誕生したのが「河津桜おさききっぷ」だ。

「渋滞でツアーバスが予定通りの時刻に着けない場合に伊豆高原駅から電車に乗り換え、桜まつり会場でツアーバスに合流する。こちらは通常運賃の30%割引となる560円で提供している」（関谷課長補佐）

沿線住民や観光客に向けた伊豆急行の企画切符は、いずれも利用者の立場や使い勝手がきめ細かく配慮されているのが特徴だ。

「電車利用を促進していくためには、企画切符や駅サービスの向上を通して、地元の方々が利用しやすい環境をつくるていくことが必要」と塚本次長は語っている。

観光素材を地元と一緒に育てていく

昨年9月16日、伊豆急行社内に中長期的視点から誘客の促進に取り組むことを目的に「沿線活性化推進委員会」が発足した。メンバーは若手社員10名。各自の



伊豆急行株式会社 経営企画部
企画担当課長補佐

関谷 稔
Minoru SEKIYA



伊豆急行株式会社 経営企画部
次長兼 企画担当課長

塚本 昌哉
Masaya TSUKAMOTO

案を持ち寄りながらの議論が続いている。新しい観光素材、「伊豆の宝」の掘り起こしが課題だ。

「新しい箱ものをつくるのか、何かを誘致するというのは、困難なだけではなく意味を持たない時代になっている。地元の方々がこれまで大事にしてきたものを、一つずつ掘り起こしていくことこそが必要。地元ならではの素材を、ご覧になったお客さまに、われわれが説明を加えることで興味を持っていただけるようになる。お客さまはもっと力強いものに育っていく。それがこれからの「観光」であり、これまではその説明の部分が欠けていたのではないかと比企次長は語る。

特集：動き始めた伊豆観光振興

[伊豆急行と沿線地域の新たな取り組み]



1 2月上旬から咲く伊豆の河津桜 2 伊豆北川駅から海を眺める 3 伊豆高原駅の伊豆急行資料館「ONE TWO NINE」 4 稲取の「雛のつるし飾り」 (1)(2)写真・割谷英雄

新しい宝となり得る素材——伊豆には「歴史や人材、食材など、素材が豊富に揃っている」と比企次長は続ける。

歴史的な素材として着目しているのが、江戸時代からそのままの形で残る築城石だ。東伊豆町にある築城石を伊豆高原駅に移設するなど、情報発信の準備を進めている。また、伊豆半島内に点在する石仏にも注目しており、石仏をめぐるとウォーキングコースの設定も検討したいという。「人」の魅力伝える企画としては「オモシロ駅長」の募集がある。伊東を除く全15駅で、駅周辺の旅館のおかみさんや漁師、観光施設の館長などに駅長になってもらい、伊豆急行と一緒に伊豆を盛り

上げる活動を行う。観光客との交流を温めてもらうことも大切な仕事だ。さらに沿線別荘地には、リタイア後に居住した歴史や自然に造詣の深い人が多く、そうした人たちに観光のガイドとして活躍してもらうことも視野に入れてい

る。食関連では、これまでに9冊刊行している地元グルメを紹介するガイドブック『伊豆ジモトグルメ』最新号の制作を検討中だ。「鉄道も一つの観光の素材。鉄道会社は電車という素材を育てていく役割を持っているが、同時に、お客さまがいいと思ってくださる沿線の素材を、地元の

方々と力を合わせながら一緒に育てていくことも大切な使命。鉄道会社ならではの視点で、地元の方々が気付かない魅力的な素材を見つけることもできる」（比企次長）

こうした取り組みの当面の目標は、言うまでもなく伊豆観光の振興だ。そして、観光振興のさらに先にもう一つ、沿線活性化推進委員会が描く未来がある。

沿線の地域経済は、大半が観光に関連するサービス業で成り立っている。高齢化で生産人口の減少が問題視されているが、実は観光不振による雇用の減少も若年層の流出が続く大きな原因だ。一方で、農業や漁業は就業人口が不足している現実がある。そこで、沿線活性化推進委員会では、エコツーリズムなど農業や漁業と観光をリンクさせるなどの施策で、1次産業や雇用の活性化することができないかと考えているのだ。その先にあるのは、沿線人口の増加という最終的な目標だ。

「そのためにも行政をはじめ関係各所との連携を強化し、地元住民との間をつなぎながら新しいことを行っていくのが、われわれの責務だと思っている」と比企次長は語る。

ピンポイントで観光をつないでいく

伊豆観光振興の難しさの一つに、伊豆半島の広域さがある。伊豆急行線だけでも4市町にまたがり、観光協会もかなりの数が存在する。地域にそれぞれの歴史や文化があり、名所・名物が点在する優

位性が、逆に「伊豆」としての統一されたイメージが持たれにくい理由となっている。

そうしたコンテンツの多様性を逆手に取って、伊豆急行は、ピンポイントの観光を打ち出していく方針だ。

「ただ、伊豆に来てください」というのでは、お客さまに興味を持っていただけない。歴史に興味がある方はここ。現地ならではのグルメを味わいたい方はここ。など、目的と場所、あるいは季節も限定したコンテンツをつくる」（比企次長）

その最たる成功例が「2月に河津で見られる河津桜」だ。爆発的な人気を呼び、いまでは早咲き桜の代名詞になった。このような季節の名物が各地域に数多く育てば、通年で伊豆に観光客が訪れるようになる。また、地域同士が連携することで、観光客の周遊行動も生まれる。例えば、河津桜の季節は、近隣の稲取温泉が江戸時代から伝承する「雛のつるし飾りまつり」を開催。河津桜見物に訪れた多くの観光客が稲取に立ち寄っている。

「そうしたコンテンツを一つでも多くつくって、いつ来ても楽しい伊豆」ができるのが理想。伊豆急行は、コンテンツを持つ各地域をつなぐ役目を果たしたい」と比企次長は抱負を語る。

国内の観光停滞が続く中、不振に苦しむ地元は、伊豆急行に大きな期待を掛けている。伊豆急行は、次代の伊豆を切り拓き進む「黒船」であることに変わりはない。